

## テキストの生成論的研究の今日的意味：吉井亮雄 『アンドレ・ジッド「放蕩息子の帰宅」校訂版』

和田，章男  
大阪大学大学院文学研究科教授

<https://hdl.handle.net/2324/21099>

---

出版情報：流域. 33, pp.30-35, 1992-12-30. 青山社  
バージョン：  
権利関係：

## テクストの生成論的研究の今日的意味

—— 吉井亮雄『アンドレ・ジッド』放蕩息子の帰宅』校訂版』

和田章男

創造の源泉に対する興味は尽きない。作家にインスピレーションを与えた書物、絵画、音楽を探り出すこと、作品にテーマや材料を提供した伝記的事実や歴史的・社会的事件を調べ、また作中人物のモデルを探索すること、従来よりなされてきたこのような研究は今でも価値はある。しかしながら、芸術作品の創造を問題にする時、源泉へ遡るだけでは充分ではない。そこにあるものは、芸術家の外部において完成されたもの、あるいは既成の事実ではない。探究しなければならないのは、芸術家の創造活動が開始した時点より作品の完成に至る道程である。今日、ジッドの『日記』やヴァレリーの『カイエ』が小説や詩以上に強い関心を引きつけているのは、そこに断片的でありながらも、創造の豊かな萌芽が満ちあふれているからであろう。見事な作品を創り出した芸術家を人は天才と呼ぶ。

いかにして創造がなされたか、理解しがたく、神秘的であるが故に天才と呼ぶのであろう。したがって創造の過程を明るみに出すことは、芸術家から天才の称号を奪い取ることかも知れない。ところで作品の生成過程を追求するには完成以前の何らかの創作の痕跡が残されていることが絶対的必要となる。そのような資料が現存しているかどうかは偶然に左右されるし、また芸術家のタイプによっても事情は異なる。インスピレーションを受けるごとにためにノートを取ったベートーヴェンには有効だが、すべてを頭の中で練り上げ、音符を書いた時には既に完成された作品になっていたというモーツァルトには有効ではない。しかしモーツァルトにあってもやはり頭の中で推敲が重ねられていたに違いない。作品の制作途上の痕跡を残してくれた芸術家を対象に、その作品の生成過程の研究をするこ

とは、ちょうど自然科学者が神の創造である「自然」の法則を探究するように、人間の創造である「芸術」のメカニズムに光を投げかけてくれると思われる。

今日「テキストの生成学」と呼ばれる研究は以上のような意図を持つ。書く、消す、書き直す……作家が完成したと見做すまで、下書き、清書、タイプ稿、校正刷の各段階において、加筆訂正が繰り返されるのが通常である。このようなエクリチュールの運動を正確に跡づけ、作家の創造力の展開や飛躍をその現場においてとらえること、これがテキストの生成学である。完成されたテキストを普通の相において読むのではなく、未完成のテキストを動的な相においてとらえること、言い換えれば、テキストにその歴史性を返すことが問題となる。おびただしい数の草稿類が残されているブルーストやフローベールなどの近・現代作家について、このような観点からの草稿研究が今日盛んであり、年々論文や学会発表によって新たな発見や情報をもたらされている。これらの研究の一つの到達点がテキストの批評校訂版である。これは本来、すべての手稿や版本を比較照合することによって、信頼すべき真正なるテキストを確立することを目的としているが、近年はむしろ、特に近・現代の作品に関しては、その作品にまつわる資料の集合体としての意味の方が大きい。そこには自筆原稿以降の異文(ヴァリアント)、注釈が付けられ

るわけだが、最近ではプランや下書きなどもふんだんに取り入れられるようになってきている。たとえばアラン・フルニエの『ル・グラン・モーヌ』(ガルニエ古典叢書)やブルーストの『失われた時を求めて』(フレイアド叢書)などがそうである。後者などは旧版よりさらに一巻増えることも辞さずに実に多量の草稿テキストを収録している。このような批評校訂版の出現によって、一部の研究者ばかりでなく、一般読者もまた作家のアトリエへ誘われることになる。

吉井亮雄氏による、アンドレ・ジッド『放蕩息子<sup>(1)</sup>の帰宅』の批評校訂版は、そのような意味において、近年の最も大きな成果の一つである。これは一九八七年六月にパリ・ソルボンヌ大学に提出された第三期課程博士論文をもとに、若干の修正を加えた上で、本年(一九九二年)二月に九州大学出版会より刊行されたものである。フランス語による学位論文がほぼそのまま日本で出版された意義は大きく、この校訂版が日本においてのみでなく、全世界のジッド研究者から注目されるものであることはまちがいない。ジッドの作品の批評校訂版としては、これまでに『田園交響楽』(クロード・マルタン)、『プロセルピナ／ベルセポネー』(パトリック・ポラード)、『ナリス論』(レジャン・ロビドゥー)、『アンドレ・ワルテルの手記と詩』(クロード・マルタン)の四点が刊行されており、また吉井氏によると、現在準備中のものとして『サユール』(ジャン・クロード)、『背徳

者』(デイヴィッド・キーパーワー)、『イザベル』(ビエール・マッソン)、『法王庁の抜け穴』(アラン・グーレ)、『女の学校』三部作(アンドリュール・オリヴァー)、『コンゴ旅行記』(タニエル・デロゼー)、『日記』(エリック・マルティ、クロード・クルーヴ)、批評作品(クロード・マルタン)があるようだ。吉井氏の『放蕩息子』もこれら一連の批評校訂版の一つとして加わったわけであり、日本のジッド研究者が錚々たるフランスの研究者たちと肩を並べるようになったことは誇らしいことである。

『放蕩息子の帰宅』という作品は、作家自ら「状況に想をえた小品」と呼んでいるように、わずか二週間ほどで完成された大変短い作品であり、通常一つの作品を仕上げるのに長年にわたる懐胎期間を要するジッドにあつては極めて異例のことである。また、『背徳者』(一九〇二年)と『狭き門』(一九〇九年)という二つの重要な長篇にはさまれていることもあつて、『放蕩息子』(一九〇七年)はこれまであまり重要視されていなかった。しかしながら、これら両長篇を隔てる七年間という長期間、ジッドが三三歳から四〇歳という働き盛りの時代に発表された新作はこの小品ただ一つだという事実注目しなければならぬ。実際『背徳者』出版以降、ジッドは宗教上の不安や創作上の悩みから精神的な危機に陥り、書けない状態にあった。しかるに五年間の沈黙を破って発表されたのが『放蕩息子』

であり、その二年後には、長い間難行していた『狭き門』も完成に至るのである。この小品はしたがって創作力の回復のきっかけとなつた作品であり、ジッド自身大変満足もし、また反響も大きかつたことを考えても、あらためて見直されるべきであらうし、とりわけジッドの創作活動全体をとらえる上で無視できないものと言えよう。

ジッドにおいては、彼自身も言っているように、「作品」と「生」とは分かち難く結び付いている<sup>(2)</sup>。それ故に、ジッドに関する数多くの研究書の中でも伝記的著作が重要なものとなっているのもうなずける。しかも時期ごとに三人のジッド研究の大家が分担し、それぞれが大部であることもジッドならではの言えようか。ジャン・ドレーの『ジッドの青春』、オーギュスト・アングレーヌの『新フランス評論』の初期<sup>(3)</sup>、そしてその間の時期をクロード・マルタンの『アンドレ・ジッドの成年期』が埋めることになる。『パリュード』(二八九五年)から『狭き門』(一九〇九年)までの時期を扱う予定のこの大著は、まだ上巻しか発表されておらず、『背徳者』の出版時点(一九〇二年)で終わっている。下巻において当然『放蕩息子』執筆時期が扱われるはずだが、吉井氏による、多くの未発表資料と詳細な注釈を含む校訂版がそれに先行して発表された。吉井氏の博士論文の審査員ともなり、賛辞を惜しまなかつたクロード・マルタンは

この校訂版に多く負うことになるであらう。

さて、吉井氏による『放蕩息子の帰宅』の批評校訂版は全部で二六二ページであるが、『放蕩息子』のテキスト自体はわずか三〇〇ページほどであり、しかも各ページの半分は、自筆原稿からすべての版本に至るまでの、あらゆる異文に充てられている。それは句読点にまで及ぶ大変綿密かつ完璧なものである。その他のページにはこの作品にまつわる可能な限りあらゆる資料が収められ、それに詳細な注釈がほどこされているわけであり、この校訂版は『放蕩息子』と、これまであまり知られていなかった同作品執筆当時のジッドに関する優れた研究書と言ふにふさわしい。

一〇〇ページに及ぶ序論においては、この作品の執筆と深い関係のある、クロードル、ジャムとの宗教上の議論、作品分析、テキストの成立過程、当時の批評界の反響などが論じられている。そしてこの校訂版の大きな価値は、三〇通の貴重な未発表書簡を公にしたことである。同時期に留守し、在仏中親しく交際して頂いた筆者は、吉井氏の未発表書簡に対する情熱と執念には敬意を表さざるをえない。さまざまな蒐集家の手元に分散しているジッドの書簡を求め、吉井氏は文字通り東奔西走されたのである。そして、これらの書簡に付けられている一つひとつの注が厳密な調査の結果であるこ

とは言うまでもない。さらに、この校訂版に付けられた文献目録は実に完璧であり、『放蕩息子の帰宅』のすべての版本や研究論文(諸外国のものも含まれている)ばかりでなく、翻訳、上演記録、新聞などの書評にまで及んでおり、まさしく同作品に関する資料の集大成となっている。

この校訂版に至る吉井氏の研究は何よりも生成論的研究である。この種の研究において最も大事で、第一になすべき基礎的作業は資料の整理である。生成学はテキストの歴史を再構築することによって、作品の成立過程を、あるいはエクリチュールのダイナミックな動きをとらえることを目的とするが故に、現存資料を時間的秩序のもとに並べることが重要となる。いつ書かれたのか、どのような順序で作成されたのかを問うことから始めなければならない。通常、日付が記されることのない手稿やタイプ稿などについてのこの種の調査はかなり困難を伴う場合が稀ではなく、テキストの異同の綿密な比較、書簡の探索から字体、用紙の調査に至るまで、可能なあらゆる検討をもとに結論を出すのである。

『放蕩息子の帰宅』に関して言えば、下書き(部分的に現存)、清書完成稿、タイプ稿、校正刷と進む。生成論的見地からすると、加筆訂正が最も多い下書きの段階が興味深いことは言うまでもない。そこにおいては、創造への試行錯誤が実地に確かめられるからであ

る。しかし、それとは別の意味で、タイプ稿の重要性に注意を引きたい。一般に作家がいつからタイプ稿を作成するようになったのか、筆者は正確に知らないが、同時代のブルーストの例からも二十世紀初頭にはかなり一般化していたように思われる。タイプ稿の利点は、他人にとって読みやすいということ、そして容易に複数部数を作成できることである。出版前に、一部を手元に置きながらも、批評や感想を求めて、友人や批評家に送るのはしたがってタイプ稿なのである。この段階において、他者の意見によってテキストに修正が加えられることがしばしばある。このことが一般的に言って、タイプストに見せるだけの清書原稿よりも、タイプ稿の方に多くの加筆訂正が見られる所以である。下書きの段階での創造活動が全く個人的なものであるのに対し、タイプ稿に至っては、他者の目に触れることによって、テキスト創造がいわば社会的なものとなつてくると言えるのではないだろうか。タイプ稿での改変が多いもう一つの理由はさらに重要である。作家はタイプミス<sup>3</sup>を訂正するためにも必ず自らの作品を読み直すことが必要になる。この時作家は客観的な目で、いわば自己批評<sup>4</sup>することが可能となり、それに基づいてテキストに改変をほどこすのである。『放蕩息子』に関して、吉井氏が推論しているように、複数のタイプ稿が存在したはずである。この作品は仏独二カ国語での同時出版が企図されていたのであり、

翻訳家クルト・ジンガーに送付されたのもタイプ稿であった。また友人のコポーやドゥルーアンに意見を求めながら修正を行なったというのもこの段階であろう。ここに他者の目が認められるのである。ところがこの貴重な資料はこれまで確認されておらず、現存するのは二年後の第二版のために使用されたタイプ稿だけなのである。しかるに吉井氏は、このタイプ稿こそ一九〇七年に第一版のために作成されたものだということを、清書稿との比較、用紙や字体の観察そして何よりも決定的なことに、ドイツ語への翻訳のための自筆の一つの注が明らかに翻訳ジンガーに対するものであることから証明した。筆者自身、ブルーストの重要なタイプ稿の作成時期がそれまで推定されていた時期よりかなり以前であることを実証することによって、大きく研究を進めることができた経緯を持つているだけに、この時の吉井氏の発見の喜びは察するに余りある。さらに、吉井氏の研究に大変好意的に協力してくれたカトリヌ・ジッド<sup>5</sup>女士が祖母マリア・ヴァン・リセルベルグ旧蔵のジッド・コレクションから『放蕩息子』の校正刷を見つけ、連絡を受けた吉井氏は逸早くこれを初校であると同定した。この初校と作成年代が確定されたタイプ稿とによって、同作品のテキスト成立過程が完璧に跡づけられたのである。

二十世紀の文芸批評は「作品」と「作家」を区別することから始まった。テクストの自立性ということが、ヌーヴェル・クリティックの共通したスローガンであった。歴史的時間から切り離されたテクストは、無限に意味を発するがごときであり、フォルム(形)こそ重視されながらも、無定形なものに至ったのではないだろうか。そのような不確実性に対する不安からであろうか、あるいは、コピ

ーの時代である今日、オリジナルなもの、唯一無二のものに対する、生の手触りに対する郷愁からであろうか、近年作家の手稿に対する関心が高まっている。テクストを歴史的文脈の中に置き直すこと、それはテクストの「原因」を探ることを意味する。それはすなわちテクストの作り手である作家に再び照明を当てることである。書き、消し、書き直す、「創造的自我」を働かせる「書く人」こそが問題となる。「生きること」と「書くこと」が分ち難く結び付いてい

ジョルジュ・サンド／平井知香子訳

## コアックス女王

A5上製箱入・二三三頁 二〇〇〇円

テクストの生成論的研究の今日的意味

るジッドという作家において、エクリチュールの問題が新たに問い直されることが必要であろう。

### 注

- (1) André Gide, *Le Retour de l'Enfant prodigue*, édition critique établie et présentée par Akio Yoshi, Presses Universitaires de Kyushu, 1992.
- (2) ジッドがマドレーヌに送った手紙の一節に、「人生は作品と分ち難い」という言葉が見られる。『胃徳者』において、ジッドは主人公から距離を置き始めるようになることと一般に言われているが、人生が作品に強く反映していることに変わりはない。
- (3) 作品執筆の背景や作品分析については、『流域』二五、二六、二七各号に邦文にて連載されている。

文字通りフランス・ロマン主義の軌跡を生きた閨秀作家が、孫の教育に仮託したコントの一つとして、遙かな〈昔話〉の源泉に汲みながらも、自伝的色彩を深く止めた最晩年の珠玉。複雑な作品の拡りを綿密詳細に跡付けた解説に、色刷り口絵二点と挿し絵を添える。

青 山 社 版